九十九　世界と人間の生について　老園丁の未完の廻心　第二章

Letter No2

荘周さん、第一章で世界についての人間の考え方を整理してみましたが、とても平凡でおおざっぱなもので、辟易されたでしょう。それとも、ゴータマ・シッダールタさんを特別扱いしたことにご不満でしょうか。たしかに不均衡な取り扱い方だと思われても仕方がありません。でも、荘周さんは大人ですから大目に見てくださるはずですね。それに、わたしの「認識と言語についての考察」につきあってくださった荘周さんはわたしが誘導しようとしている方向をお察しのことだと想像します。ともかく、一通りの概念的な整理をしたうえで思索を進めようと意図したのです。この章では、わたしが行きすぎたり大いに足りないところが目立ってくるはずですから、本当は、問題のあるところでそのつど疑問をさしはさんでくださると、もう少しましな整理ができるのでしょうが、それができませんから、夢に現われて示唆をお授けください。せいぜい努力するつもりです。

第二章　現代人は世界をどう見ればよいか

4　現代人の世界観

学問的な探求方法を確立した近代科学が興ると、宗教もそして哲学もその存在基盤を揺るがされました。しかしながら、現実の人間社会では、今も、哲学的な思考法は形而上的な分野を含めて捨てがたい思想を提供しているし、宗教も重要で無視することのできない役割を果たしています。事物に霊性を見ようとする態度も消え去ってはいません。現代人は、そのときどきそういう思考の範例に従って、世界と人間をとらえ、行動を選んでいます。わたしもその例にもれないでしょう。

けれども、この思索でわたしは、カントの認識論を出発点にし、科学の立場から世界と人間を考えることにしようと思います。というのは、カントの提出した『純粋理性批判』は、それまでの世界の見方を批判し整理することによって、以後の世界認識の基礎を据える画期的なものだった、と考えるからです。

D　イマヌエル・カントが切り開いた道

D1　「認識する」とはどういうことか

あとの考察に備えるため、あらかじめ、カントの言ったことで重要だと思うことを簡単に整理します。カントの使用する諸概念とそれらの関係を把握しておくことは必要でもあります。ただし、実際の認識において重要だと考える補足を加えるので、『純粋理性批判』が提起した認識についての〝純粋基礎論〟をゆがめるかもしれません。

a　カントの認識論の骨格と重要概念

カ①　人間の認識を三段階に分けてとらえる。その能力を、**感性・悟性・理性**と呼ぶ。

「人間の認識は、感官から始まり、**悟性**に行き、**理性**で終わる」

「人間の認識は、**直感**を得て始まり、**概念**に進み、**理念**をもって終わる」

ii　**感性**は、感官（感覚器官）を使用して**直感**を得る。感官から得られた多様なものを統覚が統一し、直感は**表象**として意識される。

iii　**悟性**は、感性によって得られた表象に**論理形式「カテゴリー」を**適用・**判断**し、構想力を用いて論理的な連関をもつ**概念に**表現して、概念的な認識をもたらす。直感の得る表象と概念とを合わせて広い意味で**表象**（心象）と呼べるだろう。

iv **理性**は、悟性認識で得られた概念（複数）を系統立てて総合的で体系的な理解へ導く。理性が推論によって獲得する〝概念〟を**理念**と呼ぶ。

カ② 人間の認識は感官から始まるのだから、認識の対象は、原則的に、感覚器官が感じることのできる経験的な事物である。「**物自体**は知られない」という言葉も、認識の対象が基本的には物であることを告げる。認識は「**経験的実在**」を前提し、人間は物の示す**現象**を認識するのである。

カ③ 人間の感性には、時間と空間の形式で直感を獲得する能力が**先験的**に具わっている。

カントは、近代科学の最初の成果である力学を理解して、力学の基礎概念である時間と空間を認識論の骨格にとりこんだのである。ただし、認識の基礎論に経験からもたらされる内実が入りこむことを避けるために、人間に先験的に具わっているのはその「**形式**」だけだとした。補足すれば、古典力学において、時間と空間は事物の運動を記述するのに前提される不可欠な変数だが、力学現象の直接の研究対象ではない。そこでも、現象の記述のための形式だと言うことができる。現実の認識行為において、カントの認識論は科学の要素を盛りこむことのできる形式を用意した、逆に、科学的認識はカントの認識論を基礎にして遂行される、と言うことができる。

カ④　悟性は直感の得た表象をカテゴリーという論理形式に則って概念にもたらすのだから、人間の認識は論理的に行なわれ、認識は論理をはみ出すことができない。人間が悟性の段階の認識でカテゴリーという形式を先験的に具えているという超越論的要請は、現実の認識行為においてやはり経験に支えられているだろう。

カ⑤　③と④から、表象を広い意味にとって言えば、認識は表象の操作である。

カ⑥　人間の理性による認識も表象の操作と言うことができる。しかし、理性が操作するのは、悟性がもたらす概念であって、感性の得る表象ではない。だから、理性認識は、経験的な事物を直接の対象とするのではない。

カ⑦　認識が理性的な段階に進んで得られる概念の統合的な体系が**理論**である。⑥から、理性による推論によって到達する理念を究極的な真理と断定すると、アンチノミーにおちいり**超越**となる可能性がある。超越は認識からの逸脱である。

ii　厳格に言えば、**法則**は理論が意味のある体系となるように要請する**統制的**な原理である。数学の**構成的**な論理を例外として、対象の認識によって獲得される法則も理論も、**経験**に支えられてはじめて確実になる。理性だけを用いて経験に支えられない考察は超越的な「形而上学」と位置づけられる。

理性運用上の戒め

戒め①　認識の構えにあって認識し思考しているとき理性は「意識」を意識するが、意識が対極にある対象とは別に単独で存在すると考えるのは、認識からの超越である。

戒め②　理性はとどまることを知らず思考を続けようとし、経験から離れ論理を超越する理念にまで至ろうとする。それを警戒しなければいけない。

ii　超越的な理念とは、次の場合の「神」のような理想が至る観念である。

カントは、神の存在証明と神の不在証明がアンチノミーにおちいると論じた。

「神」の存在を論証することはできないのである。

だから、神が存在するか否かのような超越的な問いに対しては答えない、というのが賢明な応答である。

iii　古くから人間が希求した「不死の魂」や「永遠の存在」なども理念であって、経験的で論理的な支えのある確実な概念ではない。

iv　理念が組み立てるこのような願望は、この世界で経験的に実現するようなことではない。そのような願望は断念するのが賢明である。

戒め③　②で考えたことよりも粗雑に想定された神秘的事象がこの世界で起きることは、

いっそう期待できない。カントは超常現象をうんぬんすることを批判した。

b　認識についてのわたしの理解

aの要約はカントの言葉から多少逸脱している可能性がありますが、さらに踏みこんで、カントの認識論を敷衍してわたしなりに現代的に要約すれば次のようになります。この箇条書きが指針として役立つように、カント以後に数学や科学や論理学によって明確になったことも加えます。わたしの要約はおそらく不十分で論理が精密でもないでしょう。改善が必要なことを念頭において、順不同に要点と考えることを列記することにします。

認識について要点

要点①　「認識する」とは、認識主体と対象という構えの下で「対象を知る」営みである。この構えのないところで事物に言及することはできない。

ii　認識主体が対象を知って行動に移す営為は、対象となんらかのやりとりをして対象についての情報を感覚器官にとりこんで知覚の表象に表現する器官を経て、さらにそれを総合的に処理して把握し、行動の指令にまでもたらす、というやり方

で行なわれる。人間のこの一連の営みは、神経回路網で表象を変換処理して行なわれる、と考えられる

認識主体に単細胞生物まで含める場合には、感覚器官や神経回路網も拡張した意味でとらえなければならない。

iii 「認識すること」を広い意味でこの営為全体と定義しよう。そうすれば、「認識すること」は「生き物が生きること」に近づく。

要点② 生物が生きるために認識する対象は、原則的に、認識主体と相互作用するなんらかの事物である。

要点③ 認識できるのは対象（事物）の示す現象である。

ii ある認識行為において、認識できるのは対象（事物）の示す分量・性質・様態である。このとき、対象である事物が何かを言いつくすことはできない、

iii 認識できるもう一つのことは、対象（事物）の変化・運動である。それはなんらかの関係として認識される。複数の対象についてもそれらの関係を認識する。

iv つまり、認識主体は事物の現象を認識するが、物自体を知ることはできない。

要点④ 認識主体は、生命活動すなわち認識活動において事物を経験している。

ii この意味で、認識主体にとって対象である事物は経験的に実在する。

iii　認識活動で事物の対極にある認識主体も、生命活動において実在している。

要点⑤　人間の十全な認識から知られることは、事物は時間・空間に存在し変化・運動もそこでの出来事として起きる、ということである。

ii　ひるがえって、認識主体はどのようにして事物の出来事を時間と空間で起きることと認識できるかと問えば、認識主体が現象を時間と空間での出来事として認識する先験的な能力を具えている、と考えるほかはない。

　その能力の起因は、認識主体も時間と空間に生きる事物・事象としてあることに求めることができるだろう。

要点⑥　分量・性質・様態および変化・運動を認識にもたらす機構について、

i　一般に生物の認識は表象の操作によって行なわれる。

　明確な言語能力をもつ人間の認識では、表象は言語表現に至る。

ii　人間の言語操作は論理的に行なわれる。

　生物の表象の操作も原理上論理の操作と考えられる。

　この能力の起因も、認識主体が時間と空間に生きる事物・事象としてあることに求めることができるだろう。

要点⑦　要点⑥から、人間の認識は、必ずしも事物の事象ではない言語の表象する抽象的

な事象に向かうことができる。
しかしその対象は、事物に対する認識の構えが保証するような実在的な事象とは限らない。

要点⑧
論理は認識に伴う形式である。

ii
論理は、要素間の関係を次々に変換することで成立する。言い換えれば、論理はその変換を貫くある構造・形式であるが、論理的変換は質的に新たなことを加えない。つまり、論理は論理を成立させている根拠を与えない。これは、ウィトゲンシュタインが『論理哲学論考』で論じたこと。

iii
最も論理的と考えられる代数学で、〝完全な〟論理の体系は自己を支える根拠をもたないことが証明されている。ゲーデルの不完全性定理。

要点⑨
認識は悟性の論理的な働きによって成立し、出来事は要素の関係として論理的に把握される。

ii
事象の認識で行なわれていることは、要素間の関係を悟性と理性によって次々に変換することであり、達成される認識の体系は論理的にその根拠を示せない。

要点⑩
認識において次の限界を超越してはならない。

i
認識の構え①～⑤は、事物の認識がこの世界内で行なわれる営みであると規定す

る。事物の認識はこの世界を超えることができない。この意味で、認識には経験的な限界がある。

ii　要点⑥～⑦から、理性は必ずしも具象的な事物に関わるのではない事象にも向かうことができるが、要点⑧～⑨から、理性的な認識はその根拠にまで到達することができない。つまり、理性認識には論理的にも限界がある。

要点①～⑩は、人間の認識を整理しようとした試みです。わたしは認識を生き物の生命活動全体に広げて定義しようとしていますが、その全般的な要点を列記するほどの知識と力がありません。この要約はその拡張された認識に関して十分なものではなく。人間という生き物の認識について不十分でしょう。人間の生きるための方法でもある認識について、さらに鍛錬が必要だとわきまえる必要があります。

要点について付記

カントが『純粋理性批判』で近代的な「認識論」を提起したとき、彼の前には、「我思う、ゆえに（もしくは思いつつ）我あり」と言明して近代的な哲学を切り開いたデカルト

がいました。その考え方は、「延長をもつ存在と精神的な存在」を対立項とする二元論（身心二元論）でした。神を容れる場をつくる考え方で、あれほど明晰な思考を提唱したデカルトも、なお、神の存在を証明しようとしました。それに対して、カントの認識論は、「認識の構え」の下でしか事物を考察できないとする判断によって、二元論を克服したのだと思います。人間理性によって神の存在を証明しようとする議論が成立しえないことも示しました（これは論理的な問題でもあります）。ここからニーチェは、「神は死んだ」という判断に進みました。他方で、カントの認識論は、それ以前にあった哲学の議論における形而上学・観念論・懐疑論・経験論などを克服するものでもありました。つけ加えれば、カントは、神秘主義者による超常現象の議論も批判して神秘主義への逸脱も戒めました。くりかえしになっていますが、近代的な認識論はこの世界を認識するために必要な構えと方法を提示するものだ、と思います。また、科学を含めて、認識に拘束条件が伴うことを明らかにしたのでもあります。

D2　理性を運用するときの指針

もろもろの事物・事象をできるかぎりよく認識できたとしたら、次の課題は、その認識

に基づいて理性をよく運用して、できるかぎりよく行動することです。カントは、理性の運用についてさらなる指針を与えています。すなわち、カントの『純粋理性批判』が提出したのは第一に認識論ですが、その認識論を基礎として、三つの『理性批判』が提起しているもう一つ重要なことは人間理性の運用に関することです。

運用するときの戒めはすでに記しました。しかしカントは、人間理性が純粋に希求してきたことを一概に排除することはしませんでした。昔の賢人たちの提出した理念に敬意をもって対応し思索しました。そして、理性の積極的な面をすくいとって、よりよく運用する指針を挙げます。それは、生き方を探る次の章で考察しましょう。

E　科学そして人文学・社会科学という営為

近代科学は、近世から始まった広く現象を合理的に理解しようとする人間精神の高まりの中から生まれました。惑星の運動の観測から発見されたケプラーの法則と、ガリレイによる落体運動の観測から見出された運動の規則を、統一的に説明する力学法則を発見したのはニュートンでした。その理論は、それまで理解できていなかった力学現象に合理的な説明を与えることができました。この成功は、自然科学というものの規範的なあり方を人

間に教え、そこで開発された実証的で実験的なアプローチと、規則や法則を数理的に表現する方法は、その後の自然科学の方法の模範となりました。

その成り行きをよく理解して、カントは近代的な認識論の基礎を据えたのです。その後の自然科学の進展を見れば、科学が近代的認識論の基礎の上に築かれていること、逆に、近代的認識論は科学と歩みを共にして鍛えられている、と言うことができるでしょう。ところが、自然科学の成果と展望を話題にするとき、われわれの理性はしばしば、認識論と科学が相携えるこの基本的なあり方―科学に対する拘束条件―を忘れて高みまで進もうとします。しかしわたしは、カントの戒めた超越の問題を忘れてはいけない、と考えます。この基本をおさえたうえで、以下、科学的な認識の要諦を整理してみましょう。

今述べたことは現代の世界認識と科学を考える上で基本的なことだと思います。まず、それを要諦の先頭に掲げてから書き進めましょう。

E1　科学的認識の要諦

要諦①　科学は近代的認識論の基礎の上に築かれている。逆に、近代的認識論は科学と歩みを共にして鍛えられつつある。認識論と科学が相携えるこの基本的なあり方は、

科学に対する拘束条件であり、科学も超越の戒めを超えることはできない。

ii　科学は認識の構えの下で行なう営みで、この構えのないところで事物に言及することはできない。

iii　科学的知見は認識の構えと無関係な真理としてあるのではない。それを無条件の真理と考え理性の対象として推論を進めると逸脱のおそれがある。

要諦②　生物が生きるために認識する対象は、原則的に、認識主体と相互作用するなんらかの事物である。とりわけ自然科学が対象とするのはそのような事物である。

科学的認識の具体的なあり方

要諦③　科学の認識主体は、対象を研究するのに、対象との相互作用を観察する方法を計画的に設定する。観察は、最終的には人間の感覚器官が判断するのだが、広い意味の観測装置を具体的に作成・運用して行なう。人間が認識において身体を用いるように、科学は、方法として、身体の延長であるそういう装置も用いる。

ii　開拓者であったガリレイの例が科学の方法の特徴を示している。観測装置は、事物の分量・性質・関係・様態をできるだけ客観的な数値に表現できるように設計する。

要諦④

科学的認識の第一のステップは、そういう観察方法を用いて得られた結果を整理して規則を見出すことである。観察において事象が数値で表現できているときには、観測の整理によって規則は数の関係として表現できる。

ただし、観察は、観察をとりまく諸条件が引き起こす偶然的なあるいは観察方法または観察者に起因する誤差を伴う。この意味で、科学的な観察においても、得られる結果は蓋然的なものである。

人間の認識がそもそもそういうものだと考えなければならない。

ii

観察によって得られた結果がまちまちで十分に蓋然的な規則が得られなかった場合、研究しようとした事象に規則性がないか、観察計画自体か観測装置の設定に問題があったか、あるいはほかの原因があるかを検討しなければならない。

要諦⑤

科学的認識の第二のステップは、観察によって得られた規則を、原因と結果のような統制的な論理的関係に表現することである。カントが認識論で示したように、それが、人間の認識のやり方である。

規則はできれば客観的で厳密な論理式である数理に表現することが望ましい。

ii

十分に蓋然的な規則が得られれば、観察した対象と事象の規則について概念的な認識が得られた、と言うことができる。

要諦⑥　観察した事象に関連するさまざまな事象の規則を対照させて、そこに共通する規則が見出されれば、関連する事象全体を含む対象領域についての統一的な規則が得られたことになる。それによって、その広い対象領域とそこでの事象および統一的規則についての概念的な理解が得られたのである。これが、科学的認識の第三のステップで、一応のゴールである。

ii　その認識は、広い対象領域の体系的な理解をもたらす。それを理論と呼ぶことができ、統一的規則は対象領域の事象を貫く法則である。

科学的認識は経験によって支えられること、科学的認識と認識論は相携えて進む歴史的なものであること。

要諦⑦　このことの最初の実例が運動の法則の発見がもたらした古典力学の理論体系で知られる。二十世紀になると人間は、ニュートンの運動方程式に適用限界があることを知った。したがって、自然科学の法則と理論の確実性はいつも経験によって試されなければならないということ、また、理論体系は〝適用限界のある真理〟だということである。

要諦⑧　相対性理論の発見は、カントが直感の先験的な形式とした時間と空間の概念を変更した。

カントの認識論の基礎にあった時間と空間の概念が科学的認識によって修正を受けたのである。人間の認識が運用する身心の感覚器官は直接的に相対性理論の時空を認識することはできないけれども、感官を最終判断の手段として用い、感官から始まる人間の認識が科学の到達した結論を理解して、直感的で近似的な概念を修正したのである

量子力学の発見は、極微の世界に、人間の感覚器官で直接的に把握できるモノの—粒子と波動とを区別するような—あり方・運動とは異なる運動様式があることを明らかにした。しかし、人間の感覚器官の能力を超えた事物・事象の存在・運動様式も、説明が複雑になるけれども、カントが措定した悟性認識の先験的な論理形式は有効に働いて、それを理解することができる。

したがって、科学的認識は、カントが基礎に据えた認識論を修正した認識論の上に立つ。要諦①はこのように理解しなければならない。認識論と科学的認識は共進する歴史的なものだということである。

要諦⑨

観察方法は技術に拘束され、使用できる技術は科学の進歩に負うから、科学的認識は歴史的な営みである。進化論を受け入れれば、人間を含めて生物の認識能力そのものの進歩も歴史的なものである。

ii 科学的認識つまり人間の認識は歴史的なものだということである。

iii　この点でも人間の認識は条件づけられている。

科学の対象とする現象それ自身が規定する科学的認識の限界

要諦⑩　ニュートンによる惑星の運動の記述は科学観に大きな印象を残したが、古典力学で解析的に解けるのは二体問題までである。現代では、決定論的法則に従うけれども数値解析によってしか解くことができず、初期値に敏感な場合には必要な精度で初期値を設定することが不可能で、数値計算の途上で避けられない誤差によっても、十分長い時間が経ったあとの状態を予測することが不可能な、カオスと呼ばれる事象が知られている。

むしろ、関係する要素がどのような種類のものでどれだけあるか、要素間の相互作用はどのようなものかよく知られていない多体系で、さらに関係を表わす法則が非線形な方程式の場合、その問題を正確に解くことはできない、したがってその事象を正確に認識することができない、と考えなければならない。

ii　事物としての世界はそのような複雑系の数えることのできない集合体であり、それらの事象を予測することはできない、と考えるべきである。

自然界はそのような複雑系からできていると言うことができるが、さらに人間と人間が形成する社会の事象を知ろうとすれば、それも複雑系であること

が分かる。この部門のことはあとで考察しよう。

要諦⑪　しかし、微細に記述することができない複雑系に対して、人間は、熱力学第二法則という経験則を見出した。それは、この世界の全体的な成り行きをよく見抜いていると考えられるので、ここに特筆する。

ii　もう一つ特筆すべきことして、自己組織化という事象がある。自然界の一部は熱力学的に平衡でない開放系と見なすことができるけれども、そこにも散逸構造と呼ばれる定常的な構造が出現することがある。生物は、環境とやりとりをする開放系でありながら、そのような非平衡散逸構造（定常開放システム）を形成して生きている、と考えることができる。

生物である人間にとって、要諦⑩と⑪を認識しておくことは、世界と生き方を考える上で、不可欠である。

以上のことから言える全般的な判断

要諦⑫　科学的認識は究極の認識に到達しておらず、今後も到達は困難と判断される。

ii　認識において人間は、世界の第一原因、究極的に事物が何か、究極的に事象がな

ぜそのようでなければならないかを知ることはできない、と断念するのが賢明である。

こう考えてきて、荘周さん、認識論は「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」というような問いに答えることが困難なことを教える、だからといって、科学にその問いを発するのも期待のしすぎだ、とわたしは思います。

E2　人文学と社会科学の認識について概論的な要点

基本的に自然を対象とする科学的認識についておおよそ整理しましたが、認識主体としての人間にとって世界は単なる自然だけからなるのではありません。世界には人間と人間の形成する社会があります。それが、人文学や社会科学と呼ばれる学問の対象部門ですね。まだ知られていないことが多いこの部門についての要点をここまでのように要諦と呼ぶのは必ずしも適切ではないように思われます。ここからは、概論的ですが思いつく事項を仮に大要と名づけて整理してみましょう。

大要⑬　生物と人間自身を対象とする認識領域があるが、生物学のように対象を事物とし

て研究する学問は自然科学に含まれる。人間の神経系も自然科学の手法によって研究ができる。生物と人間に関してほかにもそういう自然科学的な領域がある。しかし、人間は意志をもって行動するから、人間の起こす事象は自然法則に従う出来事とは異なる。そういう事象を対象とする人文学は自然科学の手法では研究できない。

ii　人間の事象はどこまで理解できるか見極めができないほど複雑である。

大要⑭　神経系が自身の内で起きている出来事を「心」の動きとして意識する事象を理性だけによって探求することにも意味があると考えられるが、それはE1で考えた部門とは異なる学問である。

ii　意識や心についての思惟は理性認識の段階のもので、超越に至る危険を認識していなければならない。その思惟が十分論理的でないならば、独断におちいる。

フロイトは自身の精神分析を科学と呼んだが、自然科学とは異なると考えなければならない。その研究方法は自然科学の方法のような客観的なものとは言い難く、意識や心についての立論が自然科学ほど客観的で確実である保証はない。

大要⑮　しかし、人間の心理や言動に関連する事象は、人間が最も関心を抱く事柄である。広く人間の事象に関わる人間学と呼ぶことのできる大きな領域があると考える

ことができる。それを古くから人文学と呼ばれた領域に加えて全体としてとらえれば、広大な部門があることになる。

先ほどの「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」という問いかけは、この部門のなかで思惟する場合には意味があるかもしれない。

ii 現代ではこの部門を人文科学と呼ぶことが多いが、探求方法が科学的とは言えない場合がある。そのことに留意して、この部門の探求の方法および成果として獲得されるものを科学よりも拡張した場でとらえる必要がある。

iii この部門でも、科学的な形式に倣って、カントが四つ挙げたカテゴリーを論点として論理的な研究が行なわれている。大学などの学問的な制度の下で行なわれている多くの研究がこれに当たる。それらは人文科学という呼び名に適合的である。

大要⑯ 哲学や論理学などは、総じて理性認識に当たるこの部門の探求のなかに含めることができるだろう。

ii 以前には哲学は諸学の基礎を与えるという考え方があったが、現代ではそのとらえ方を修正する必要がある。ただし、哲学を、諸科学（漢字表記はさまざまな分野の学問という意味を付与する）と並列させてとらえるのもよくないだろう。論理学や哲学的思考法は、思惟についての普遍的な方法をとりわけ問題とする学

問と見なすのが生産的だろう。

iii しかし、カントの認識論は、単純な形而上学的な思惟が認識論的に妥当性をもたない場合があることを明らかにしたから、哲学が積極的な意味をもつのは研究対象の内容にまで踏みこんだときだと考えるべきだろう。

大要⑰ 広い人文学の部門に文学や美学・芸術などを含めて考えることができる。それらに対しても人文科学的な研究が行なわれている。

ii しかし、文学や芸術やこれに類似する領域で重要なのは創作である。それもある種の世界認識と言うことができる。

大要⑱ 世界認識という問題を考えているのだが、認識活動を生物の生命活動に近づけて考えようとしている立場からすると、感性・悟性・理性という概念に入りきらない感情などにかかわる精神活動も、この部門に入れて考える必要があるだろう。

ii 知られている知見に基づけば、人間の身心の作動には、神経回路網での電位による情報伝達以外に、化学物質を用いる機序がある。感情はそういう仕組みで作動するのだろう。それに、脳の働きでも、進化によって分化した大脳と小脳には機能分担があるように見える。人間の無意識の活動は小脳が主に担っているように考えられている。こういうことからしても、人間の生命活動は複雑な作用機序によって起きていると考えられる。

したがって、認識活動を生命活動に近づけて考察する立場からは、人間の世界認識について、ここまで考えてきた狭義の認識論を超えるようなとらえ方をしなければならないだろう。

iii だから、⑬～⑰で考えてきたような事柄を扱う部門は、「学問」という言葉がイメージさせがちなあり方よりも拡張されたものとしてある、と考えるべきだろう。

大要⑲ この部門では広い意味で経験知が問題になっている、と言うことができるだろう。文学や美学・芸術の方面から眺めてみれば、人間が生きていくときに獲得する経験知が重要であることが明らかである。

ii 人間の歴史上に現われた賢人がそのお手本を示している、その言動を学ぶこともこの部門でなされるべきことだ、と考えることにしよう。

大要⑳ 生物や人間が形成している社会は、認識主体が観察することのできる事物的な対象である。だから、この部門の学問を社会科学と呼ぶのは人文学の場合よりもふさわしく、社会科学を自然科学に準じるような方法で研究して一定程度高い蓋然性をもって認識できる可能性がある。

ii しかし、意志をもつ人間を構成要素とする社会の事象は自然の事象よりももっと

理解が困難な複雑系と言うことができる。

iii また、社会科学の部門でも、事物の事象として表現することが困難な事象を対象とするときは、学問のあり方は人文学に近づかざるをえない。

大要㉑ 経済や社会の事象などでは、事象を観察して客観的な指標で表現できる可能性がある。カテゴリーを適用してそれらを構成要素とする論理的な構造の系に構成できる可能性は高い。成功すれば、ある程度自然科学に似た理解に到達できるだろう。

ii そういう場合にも要諦①～⑫に準じてそれらの認識を扱わなければならない、

iii 社会の歴史を対象とする歴史学は、歴史的に存在した社会の事象を扱うから社会科学的な側面を持つが、個々の人間の行動にも関連させて認識し人間の事象としても表現しようとするから、人文学に重なるところがある。歴史学がこれまで人文学の分野と見なされてきたことには一理ある。

能力を超えて人文学や社会科学のことまで考察しました。まだまだ述べるべきことがあるように思いますが、わたしの能力ではこのくらいのことしかできません。一応の締めくくりとして次のように考えておきましょう

大要㉒　カントが『実践理性批判』で考えたことは、世界認識の問題とは別の実践部門で扱うのがよいだろう。それが、哲学・倫理学と呼ばれてきた学問のもう一つの課題である。言うまでもなく、実践とは生き方の問題である

ii　自然の認識も、人文学や社会科学として別扱いしてきた部門の認識も、世界をどのように認識しているかという点で生き方という問題につながる。

5　結局のところ人間は世界をどうとらえているか

現代の人間は世界をどのように認識しようとしているかを考えてきました。それを簡単に反復しながら考えをまとめることにします。

現代人は、自然科学・社会科学・人文学といった諸科学・学問を先頭にして世界を探求しています。そのいとなみによって昔にくらべればはるかに多くのことを知っている、と言うことができます。でも、ここまでの考察は、その成果に次のような付帯条件が付いていることを教えます。①認識論によれば人間の認識に限界があること、そして、②厳密に論理的な数学においてもその理論体系を支える第一原理のようなものを示すことができ

ないこと、また、③自然を対象とする自然科学でも法則と理論を支える第一原理はなくて、ただ生における経験だけがその真実性を保証するのだ、ということです。

それだけでなく、これまで知られた物理法則は「ある限定された時空で限定された事物の生成や変化を律する」という性質をもつけれども、規定が保留されているその限定条件は、現実のできごとではいわば「偶然」として働くので、具体的な自然現象は千変万化できるのです。しかも、完全に限定された少数系で事物の運行を律する法則（微分方程式）が線型的でも解くことが困難な場合があるのだし、まして、広く現実の自然現象は複雑系と呼ぶべき相互作用の連関の内にあって、その運行の詳細を記述することが困難で、未来に起こることを必要な精度で予測することも困難なことが多いのです。

つまり人間は、自然界を律していると考えられる法則について、「なぜ？」と尋ねることはできるが、その究極の答えを知ることはできないだろう、と考えざるをえません。そして、世界についての究極の答えに限らず、具体的な自然の運行の多くについて、詳細を理解し尽くすことができないし、これからどのようなことが起きるかを予測することも困難だろう、と判断すべきなのです。

一歩引いて、いや、荘周さんあなたのように遠くから大局を観ると、人間が自然について知っていることは実にわずかだ、と言うことも可能です。人が世界についてどれだけの

ことを知っているかと問い詰められれば、自信をもって「これだけのことを」と答えることはむずかしいですね。

しかも、現に生きている人間にとって世界は「単なる自然界」だけからなるのではありません。人間とその社会というものがあって、それが人間にとってより重大な関心事です。そのような者として人間は世界の内で生きています。世界とそこに生きる人間を唯物論的にとらえるとしても、思考して行動する人間のふるまいは、ある無機的要素のある瞬間のふるまいのように規則に則るものではないので、人間と社会が引き起こす現象は無機物の現象よりもさらに複雑なものと考えなければなりません。それでも人間は、人間と社会について、人文学や社会科学によって可能なかぎり学的に知ろうと努めています。しかし、無機的な複雑系でも記述し尽くすことができないのですから、まして、人間のふるまい全般や社会的事象を理解し尽くすことはできない、と判断せざるをえません。

人間にはほかに、美学的な判断を行使し、さまざまな芸術的あるいは広く文学的活動などを行ない鑑賞するということがあります。そういうあらゆる種類の活動に人間の世界のとらえ方が関与しているのだと思います。でも、こちらの方はもっとつかみどころがなくて、世界に対して自分がどんな対応をしているか明瞭に語ることもできません。少なくと

もわたしはそうです。

うーん、……人間が世界をどうとらえてきたかという観点から考えてきたのに、それをまとめてみると、自信をもって必要なだけ世界を認識していると断言できなくなってしまいました。これを真剣に受けとめるなら、改めて、わたしは世界と人間のことをいったいどれだけ知っているか、と自問しなければならない……。

おやおや、ここまでの考察は人間の認識の進展を跡付けているようでいて、すごろくで言えば、ほとんど振り出しのあたりをうろついていたのではないかという感じがしてきました。そう言うと、荘周さんは、頬笑みながらどうやったって人間はそんなもんでしょう、と悠然と答えるのでしょうね。そして、もっと徹底して人間を遠くから眺めるように勧めるのでしょうね。

この第二章をここで終わるのは中途半端だと思えて、わたしはさらに考えようとしました。そして書き進めようとしていたら、うろたえて、第一章第一節の最後の段落の文章をもう一度ここに反復しようとしていることに気づきました。わたしの探求は、ほんとうに振り出しに戻ってきたようです。しんどいところにさしかかってきた、と考えなければい

けません。無理をせずに頭を休めて、次の章で思索を立て直すことにしましょう。

二〇二一年、五月

付記：F・ジャコブの『生命の論理』を読んで考えたことを「蝶の雑記帳一〇二」に書いた。その折に、ジャコブが「予測不可能性は科学の性質に含まれている」と言っていることを知った。この認識は科学の本質的な性質を明文化したもので重要だ、と思う。それを忘れた物言いをしばしば聞く。2021, 8.26.